
東京

美雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東京

【Nコード】

N5892A

【作者名】

美雪

【あらすじ】

故郷が恋しいのはあの人がそこにいるから。あいちゃん、と呼んでくれる人は東京にはいない。

第一話

淋しいなあ

一人口に出してあたしはなんだかさらに寂しくなった。

京都に、帰りたい。

最近こう思うことが増えた。

東京の大学に通うために親元を離れてそろそろ2ヶ月がたつ。

ここしか受からなかったから、という理由で入った大学で何をするでもなく日々を過ごして。

いつの間にか夏が始まろうとしている。

私は東京の乾いた空気が嫌いだ。

標準語で話す人が嫌いだ。

京都のじめじめ鬱陶しい空気に慣れてしまっていたんだと気づく。

ゆっくりとした京都弁も恋しい。

そんなの京都にいたころには一度も思わなかったのに。

でも故郷が恋しいほんとの理由は、東京が嫌いだからとかじゃない。

故郷が恋しいのはあの人が、そこにいるから。

あいちゃん。

ふざけた声で私を呼ぶあの人の声が頭から離れない。

彼はいつもふざけて私のことを名前で呼んでくれた。

私のことを名前で呼ぶ男の子なんて他にはいなかった。

呼ばれる度に頬が熱くなって私はいつも下を向いた。でも真面目な話になるとあの人は私を名字で呼んだ。

好きやねん。

精一杯の勇気を振り絞っていった言葉は重い沈黙をつれてきた。

そしてあの人はいった。

『ありがと。でも俺は田中の気持ちには応えられん。めっちゃいい友達やねんからずっとこのままでおつてや…』

私は笑った。

『そうゆうやろなって思ってた』

笑ってるのに頬が濡れていた。

悲しかったのはあの人が『あいちゃん』って呼んでくれなかったこと。

たぶんもう二度と呼んでくれないだろうということ。

そして私はあの人から逃げるように東京にやってきた。

それでもまだ私の心はあの人を探している。

いつも笑いを含んでいるあの人の声が今でもはつきりと思いだせる。あいちゃん、と呼ぶ人は東京にはいない。

第2話

気怠い頭で教室に向かう。

月曜日の1コマ目の授業はしんどすぎる。

かといってこれ以上さばれば単位を落とすのは確実だ。

エレベーターに乗って扉が閉まろうとしたとき。

『…すみませんっ!』

飛び込んできた少年に目を奪われた。

…似てる。

細い目も、すっきりとした鼻筋も、薄いめの唇までも。
あの人にそっくりだった。

『…降りないの?』

ぼんやり彼を見ていたら、その彼が声をかけてきた。
気付けばそこは最上階で。

すでにエレベーターの扉は開いている。

『あ…ごめんなさい』

なんだかとても恥ずかしくて私は真っ赤になった。

彼は別に気にする風もなく私がエレベーターを降りるまで『開』
タンを押していてくれた。

つらつらと事実をならべたてるだけの講義が始まった。

私の頭からはさっきの少年の面影が離れない。

というよりも彼が私に思い出させてしまった、故郷にいるあの人の面影が離れないのだ。

私は本当にどうかしているのかもしれない。

あの人の声を、顔を、思い出すだけで胸がいっぱいになる。

心の底から大好きだったのだと、他人事のように思った。

退屈な講義は延々と続いているが、全く頭に入らない。

もう何もかもがどうでもよくなって、私は黙って教室を後にした。

外に出ると、抜けるような青空が広がっていた。

あいちゃん。

あの人の声が離れない。

無性にあの声が聞きたくなって私は青空を見つめ続けた。

第3話

空を見上げていたらなぜだか涙が溢れて止まらなくなった。

私は東京が嫌いで東京の人が嫌いだ。

そう、思っていたけど本当はきつと。

- - 好きになりたかった。 - -

そして好きになって欲しかった。

誰かに必要とされたかった。

東京には一人も友達なんていない。

ひとりぼっち。

私のための居場所は東京には無い。

止まらない涙を無理やり止めようと目をゴシゴシこすったものだから、化粧はとれて目は真っ赤だった。

パチン、とコンパクトを閉じて私は笑顔を作ってみた。

頬を無理やり引き上げて目を細めて。

出来上がったその顔はきつと到底笑顔なんて呼べない代物だろう。

だから私は鏡をみない。

見たら情けなくてまた泣いてしまうから。

これ以上泣いたらもう自分を保てなくなるから。

今あたし笑とるんよ。

小さく小さく呟いたらなんだか本当に虚しくなって不細工な笑顔のままわたしは新たな涙を流し続けた。

そのまま私は自分のアパートへ帰った。

大学から自転車で15分ほどのそこはお世辞にも綺麗とは言えない、私に似合いの建物だ。
階段を上がるときすれ違った若い女が私をみて少し哀れむような顔をした。

部屋に入るとムツとした空気が私を包み込んだ。

それはまるで拭いきれない虚しさのようにまとわりついて離れなかった。

靴も脱がずに玄関に座り込んで私は実家へ通じる短縮ダイヤルを、半ば無意識に押していた。

無機質な呼び出し音が2度ほど鳴っただけで私をもっとも包み込んでくれる声が受話器から流れでた。

『あいちゃんやん。どしたん?』

『……おかあさん』

特別仲のいい母娘ではなかった。

高校生の頃はろくに話もしなかった。

それでも離れた土地で聞いた母の声はそのまま乾いた心に染みこんでいった。

第4話

『どしたん？いきなり電話なんて』

柔らかに響く声の前で僅かに残ったプライドが涙をせき止めていた。

『別になんもないんよ。ちょっと…疲れたんかしらね。』

震えそうになる声を抑えて私は必死で明るく言った。

つもりだったのに。

『…あいちゃん。京都に帰っておいで。』

なんでこの人にはわかるんだろう。

『あいちゃん、よっぽど疲れとるんね』

なんでこんなにほっとするんだろう。

『お母さんが美味しいもんいっぱい作って待ってるから』
なんで涙が止まらないんだろう。

ただただ私は泣きじやくりながら何度も何度もうなずいた。

以前にこんなに泣いたのはどれぐらい前だろう。

涙は私の胸に溜まっていたいろいろなものを洗い流してくれたかのようだった。

電話を切ったら何だか久しぶりに心地よい眠気に襲われて、私はベッドに倒れ込んだ。大きな波に飲まれるように私は眠りに落ちていった。

深い眠りの中で私は夢を見た。

それはとても鮮明に私の胸に突き刺さるものだった。

夢の中で私はもう京都に帰っていた。

夏の始めの、寂しいような、それでいてどこかワクワクするような空気に抱かれて、私は鴨川のほとりに座っている。

これ以上ないというくらいに強い幸福を感じながら。

顔いっぱい笑顔で私は隣に座っている人物と話をしている。

少し長めの髪の毛も、薄い唇も、綺麗に通っている鼻筋も少しも変わってはいなかった。

あの人はにっこり微笑んで囁いた。

――あいちゃん帰って来るん、ずっと待っててんで――

第5話

夢の中だとはいえその声は余りにも柔らかく不思議な響きを帯びていた。

あの人がふんわりと動いて。

星が瞬く夜の鴨川のほとりで私はあの人に抱きしめられている。

幸せで一杯の筈なのに何故だか涙が止まらなくて、それは幸せからくるものではないと自分でもわかっていた。

目が覚めたのは夕方の5時だった。

授業をサボって帰って来たままの格好で、私は6時間も寝ていたことになる。

我ながらよくよく疲れていたらしい。

起き上がった時部屋の鏡に自分の姿が映った。

その時気付いたのだけれど、どうやら私は実際に涙を流していたらしく、目が真っ赤で頬には涙の筋がくつきりと残っていた。

今日は全くよく泣く日だな、と一人苦笑いを浮かべる。

こんな顔じゃ外に出ることもできない。とにかくまずはシャワーを浴びて、

それから夕食の材料でも買いに行こうか。

けれども全く食欲なんてなかった。

あんなに眠った後なのに体がだるくて。

結局シャワーを浴びてまたベッドに潜り込んだ。

当然眠れるはずもなく、手慰みに携帯を弄っていたらふと、ひとりの友達のことが頭に浮かんた。

大学には友達と呼べる人はいない私だけれど、高校生のころはごく普通に仲の良い友人はいた。

そして、どんなに辛いときも苦しいときも一緒に過ごして支えてく

れていた、友達もいる。

―葉山夏姫―

‘夏のお姫様’という名前がぴったりな、綺麗で明るい人だった。勝ち気で、自分をしっかり持った人だった。

彼女と私は正反対のタイプの人間だったと思う。

共通点は、お互いに‘超’がつくほどの気分屋だといえ、おそろく誰もが、私達が喧嘩の絶えない毎日を過ごしていたと想像するのではないだろうか。

その想像は半分あたりで半分はずれだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5892a/>

東京

2010年10月10日03時45分発行